

# 私の出会った

## 加藤治郎

## 歌人



加藤治郎

### 水原紫苑

にいた時、突然、加藤治郎が「こ、このテール、小さいね」と感に堪えないように言い、私たちは度肝を抜かれた。そうした場面で彼はいつも大きな手をひらひらさせて汗を拭うのである。

加藤治郎は岡井隆の直系として、前衛的な歌の構造を継承したが、この奇妙な体感を源とする無秩序なエネルギーは加藤治郎独特だ。それは師の岡井隆があくまでも都市の知識人であるのに対して、加藤治郎が曳きずつてい

る土着性の尾でもあるだろう。

加藤治郎の歌の中で好きなものを挙げると、ひとしきりノルウェーの樹の香りあれば、ツドに足を垂れて、ぼくたち

たぶんゆめのレプリカだから水滴のいっぱいといった刺草を抱く、

などになる。今までの話から少し外れるが、これらの青春歌の甘さ、香り高さもまた彼の持ち味である。エネルギーシユな歌ばかりでなく、この世界も大切に守って行ってほしい。

食事に気を配り、肉を減らして魚を多く摂っているという加藤治郎には、改めて健康に気をつけてと注意する必要もないだろうが、壮年に向かつて忙しい日々を元気に駆け抜けてくれることを祈っている。芙美ちゃんによるしく、

(みずはら・しおん「中部短歌」所属・

「NHK歌壇」番組進行役)

愛情が、彼を厚味のあるあたたかい青年に育て上げたのだと思う。

奥さんの初美さんは昔の日活映画のヒロインのような、たおやかな美人である。第二歌集『マイ・ロマンサー』の批評会の時にユキさんと一緒に見えていたので、よくこんな美人を射止めたものだ、と話題になった。今年二歳になる長女の芙美ちゃんが可愛い盛りである。加藤治郎は毎晩早く帰って芙美ちゃんをお風呂に入れてくれるらしい。

歌人としての加藤治郎の強味は、よき息子であり夫であり父である自分と、何の矛盾もなく肉体的な混沌としたエネルギーを抱えていられることだろう。実際、彼の体感はずいぶん変わっていて、みんなが何とも感じない時にひとり驚きの叫びをあげたりする。いつだったか、穂村弘、山崎郁子、私と四人で喫茶店

加藤治郎は頼りになる友だちだ。一回目に書いた穂村弘と同じく、中京大学の学生短歌シンポジウムで初めて会ったので、今年で十年目のつきあいになる。その間、考えてみれば実にいろいろなことを加藤治郎に相談して来た。どれもがずいぶん面倒な、人間関係の錯綜した問題だったように思うが、常に加藤治郎はきちんと聴いて彼らしい答えを出してくれたものだ。

加藤家は名古屋の鳴海町で菓子問屋を営んでいたという。土蔵や茶室があるというから豊かな旧家なのだろう。加藤治郎はその家の次男である。祖父、祖母、父、母——母は歌人の加藤ミユキさん——、兄、妹に囲まれて彼は育った。旧家の濃密な生活感、三人兄妹の真ん中という位置から要求される社会性、そしてとりわけ母ミユキさんの太陽のような